

## [美術館員随想]

## 小学生の団体来館と鑑賞の記録

大和文華館では、現在、小学生を対象とした普及活動を継続して行っており、「美のたより2003夏」No.143では、ワークシートを用いた試みについて紹介致しました。今回は、「没後30周年 歎美抄一矢代幸雄が選んだ美の精粹一」展をあやめ池小学校の児童が団体来館した際の内容について紹介させていただきます。2005年4月26～28日に4～6年生計201名が訪れました。

あやめ池小学校は大和文華館から徒歩約5分の位置にあり、これまでも毎年2展観ずつ来館いただいています。来館は一般の方が比較的少ない平日の午前中を中心とし、なるべく少人数になるように、クラス毎(29～37名)に分けて時間を組んでいます。今回はワークシートを用いず、資料は作品目録の代わりに、展示場の展開図に作品名・作者名をルビ付きで示したものを配付しました。

実際の流れとして、まず初めに講堂にて鑑賞マナー(美術館で作品を気持ちよく見るために…作品やガラスケースには触らない、館内では走らない、筆記具は鉛筆を用いる、展示場で飲食はしない、周りの人のことも考えて大声は出さない)と、その日の流れを伝えます。その後荷物を置いて展示場に移動し、作品に関する学芸

員の話聞きながら一巡します。子どもたちは作品の前に座り、展観担当学芸員の話や直接聞く形をとりました。この際、一方的に作品解説をするのではなく、児童に対して、作品を見た印象や発見したことなどを引き出すような問いかけを心掛けています。子どもがそれぞれ自分の目で見て、感じ、それを、今回のような友達と来る機会に、皆で分かち合える環境をつくれたらと考えています。

その後は自由鑑賞とし、好きな作品を友達と話しながら鑑賞したり、用意してきた画板を用いてスケッチを行える時間を設けています。作品鑑賞の前後どちらかには、館の庭である文華苑を散策し、季節の植物を楽しんで学校に戻りました。全体で1時間の行程です。(図1、2)

「歎美抄」の展観では、絵画や彫刻、やきものなど多ジャンルの作品が展示されました。作品解説も含めた鑑賞では、展示場の中で4箇所を選び、次のような視点を中心として学芸員が子どもと言葉を交わしながら話を進めました。まず、「寝覚物語絵巻」(平安時代)「小大君像」(鎌倉時代)「笠置曼茶羅図」(鎌倉時代)の3作品が並んだコーナーでは、構図の違いを見ます。絵巻では横長の画面を生かした俯瞰表現が見られ、人物像で

は人物を大きく描き、衣の文様が細かく描き込まれます。また、人物を小さく描き、大きな建造物をあらわした笠置曼茶羅図など、描こうとする対象の違いで描写方法も異なります。

さらに、「維摩居士像」(室町時代、図3)「呂洞賓図」(室町時代、図4)で男性像の比較を、「婦人像」(桃山時代)「婦女弾琴図」(桃山時代)では女性像の比較を、人物表現の違いから行いました。前者2作品では構図や人物の動きと表情、用いられた墨色の違いについて見ました。「風の吹いている方向は?」「どちらの絵が、空気が湿っぽく感じる?(墨色の違いに発展させる)」といった質問に対して多くの意見が出ていました。後者2作品では、「人物は何をしている?」「どちらの人物が温かそう(冷たそう)に見える?」といった質問を行い、描写表現の違いから受ける印象について、子どもたちそれぞれの感覚を話してもらいました。

さらに、「埴輪 鷹狩男子像」(日本・古墳時代)「土偶立像」(日本・縄文時代)「石造二仏並坐像」(中国・北魏時代)「金銅薬師如来立像」(朝鮮半島・三国時代)「塑像女子供養者像」(パキスタン・3～4世紀)といった彫刻作品のコーナーでは、立体の人物像を比較し、素材や製作地を含めたそれぞれの人物の表現とそこから生じる印象の違いを考える内容でした。

全体として各学年ともに子どもたちは大変熱心に作品を見ていたように感じられました。特に、自由鑑賞の

時間に行った作品のスケッチからは、どのような作品を好み、興味を持っているのかがうかがえ、時間が足りないとい嘆きながらスケッチに没頭する数名の子どもの姿も見られました。

今回のような団体来館に際しては、次のような環境を子どもたちと作っていきたくと考えています。

- ・ 作品に興味を持ち、じっくりと鑑賞する。
- ・ 美術館を楽しむ。
- ・ 自分なりの見方をし、作品に対する感想または疑問等を自分の中で明確にする。
- ・ 他の人の感想や考えを聞くことによって、見方、感覚、感想、思考などの多様性を知り、さらに、新たな発見へと展開させる。
- ・ 自分の感覚や感想、意見等を言葉やスケッチ等で表現する。
- ・ 図工(美術)のみでなく、社会(歴史、文化)との相互学習。

また、大和文華館は東洋の古美術を収集しているのも、自らが育ってきた社会の持つ文化を形成してきた文化圏を知り、身近に感じてほしい、という意図もあります。

学校に戻った後、好きな作品とその理由、感想を聞くアンケートを書いでもらいました。好きな作品が多岐に渡っていたことから、各自が鑑賞した中で、自分が好き、良いと感じる作品を選んだことがうかがえます。

子供たちに作品鑑賞や美術館を少しでも楽しいと感じてもらえると良いと思います。

(学芸部部員 瀧朝子)

図 1



図 2



図 3



図 4

